第１８９回　番組審議会

１．日　時　　平成２２年2月９日（火）１２：００～

２．場　所　　メトロポリタン盛岡ＮＥＷ　ＷＩＮＧ　３Ｆ「星雲 東の間」

３．委　員　　委員総数　　１３名
　　出席委員数　　９名（欠席委員数　４名）

○ 出席委員（敬称略）

中村　慶久（委員長）
―以下５０音順―
久慈　浩介
斎藤　雅博
中川　真
中原　祥皓
村上　幸子
八木橋　伸之
役重　真喜子
吉田　浩次

○ 会社側出席者（６名）

佐藤　滋樹（代表取締役社長）
小原　忍　（専務取締役）
藤澤　利憲（常務取締役）
前田　秀男（取締役編成技術局長）
一戸　俊行（報道局長）
今野　賢也（報道部）

○ 事務局　　村田　重昭

４．議　題　　mit スーパードキュメント　おらほが一番！

平成２１年１２月２９日（日）　１６：０５～１７：０５放送

５．議　事　概　要

今回は「mit スーパードキュメントおらほが一番！」について審議しました。

各委員からは、「地域活動を維持することが難しくなってきている中で、けんか七夕や町民運動会を通して失われつつある町民や家族の絆を感じた。番組を見て元気になった。」「カメラマンがデイレクターだったので、映像がおもしろかった。特に山車にカメラを取り付けて撮った映像は迫力があった。」と番組を評価する意見がありました。

また、一方で「通り一遍で終わってしまった気がする。後継者の問題や町民の悩みなどについて、もう少し掘り下げてほしかった。」「方言が分かりづらい所もあったので、字幕を要所要所に入れた方が良かった」などの意見がありました。

６．議　事

〇事　務　局

ただいまより第 189 回番組審議会を開催いたします。

本日ご出席の委員は 9 名、ご欠席は椎井福井委員長、斎藤純委員、東海林委員、菅原委員の 4 名です。

今回の議題は、昨年の 12 月 29 日（火）に放送されました、「mit スーパードキュメントおらほが一番！」です。本日は、プロデューサーの一戸報道局長とディレクターの今野報道部員が出席しております。

それでは、中村委員長よろしくお願いいたします

〇中村委員長

一戸さんと今野さんから今回の番組の背景などについてご説明をいただきたいと思います。

〇一戸局長

ＭＩＴスーパードキュメントは、視聴者に感動を与えられるような番組を報道部から発信

しようということで、昨年度から始まりました。今回の「おらほが一番」は通算すると４本目、今年度は２本目の番組となります。前回は「台温泉を県大生がプロデユース」という番組を審議いただきました。

ディレクターを担当した今野は、普段カメラマンとして報道の現場にいます。デイレクターとしては、春高バレーコーチングキャラバンで盛岡二高の番組を担当し、その時も審議をいただきました。

番組のきっかけは、陸前高田市気仙町の運動会が面白いらしいという話しからでした。番組ではけんか七夕など１年を通して地域の活動に一生懸命取り組む人たちを追いながら、クライマックスで運動会を紹介するという構成にしました。今回の放送に当たってディレクターと悩んだ部分がありました。ドキュメンタリーとは何か？という原点に関わるもので　社会性が見えず、運動会でみんなが盛り上がっているだけの番組になってしまうのでは、という不安でした。最終的には「こういう地域っていいね」と見ている人に思ってもらえる、気仙町の人から元気をもらえるような、そんな番組になればいいのでは、と結論づけて制作しました。

〇今野デイレクター

今回の番組の発案者は同僚カメラマンでした。気仙町の運動会が面白いという話しがあり、一緒に作ろうということになりました。実際に取材に入ってみると、地域の皆さんが何に対しても一生懸命でびっくりしました。まず、自分たちが楽しみたいということを感じました。けんか七夕にも観光客がたくさん来ます。その中でも自分たちがまず一番楽しみたい。そのことが、地域がまとまっていくには大事なことなのだなと感じました。今回の番組には特に有名な人が出てくるわけではありません。大きな出来事があるわけでもありません。地域の人の普通の暮らしが見えるように取り上げました。イベントが中心になっていますが、基本的にはその地域で当たり前に行われていることです。私からすると当たり前ではないことですが、それをそのままストレートに出そうと思いました。

取材して感じたことは、皆さんが自分の居場所である「私は気仙町の〇〇町の誰それで」ということを胸を張っておっしゃる。私だったら「盛岡の」となるわけですが、気仙町の皆さんは自分たちの地域の“自分”というものを強くもっているなと感じました。特に大きな出来事があるわけではありませんが、地方局としてはそうしたことを取材していくことも大事だと思いました。

○中村委員長

ありがとうございました。それでは委員の方々のご感想をお聞きしたいと思います。中川委員からお願いします

○中川委員

カメラマンの方が中心になって作られたということですが、なるほどそうだろうなと思いました。第一印象は、出てくる人たちの表情が生き生きとしていて、それだけで好感のもてる番組でした。陸前高田は県の外れで、私が普段接している盛岡や県北の人たちとは雰囲気が違ってすごく明るいという感じがしました。明るい人たちがたくさんいる陸前高田の話題をたくさん放送してもらって、岩手全体があの雰囲気になったらいいなと思いました。背番号17番の菊池さんという人が主人公でしたが、個性的でいいオジさんだと思って見ていました。

気になったのは、地域の問題点として、例えば就職難で仕事がなくて地域を離れてしまう、お嫁さんが来ないということです。その辺のところをもう少し掘り下げて取材できれば、「それでもがんばっています」という番組ができたのではないかと思います。

「気仙町の方々から元気が伝わってくる」ということには私も同感です。とても楽しく見させてもらいました。

○中村委員長

それでは、八木橋委員お願いいたします。

○八木橋委員

非常に楽しく、また興味深く見させていただきました。あまり時間を感じさせずに見ることが出来て、面白かったです。

気が付いた点を申し上げますと、方向性をどうするか考えたということでしたが、冒頭を見ていると話しがどこに行くのかわかりませんでした。見ているうちに山車と運動会がメインだと分かりました。個々の映像をたくさん拾っていたので面白かったと思います。

総体的な感じとしては懐かしさを感じました。地域コミュニテイが壊れていなくて町内会がまだ残っています。盛岡でも昭和30年代までは町内会の活動が残っていました。町内会で海水浴に行ったり、温泉に行ったりすることがよくありましたが、いつのまにか無くなって

いました。

まだ陸前高田に町内会の活動が残っているというという原因は何なのか？人口の問題なのか？産業が半農半漁だからなのか？なぜ、あそこに残っているのか？リポートの中では、普段は静かな商店街も祭りになると賑やかになると紹介されていましたから、実態はそうなのでしょう。それでも町内会が今でも生きているのはなぜなのか？懐かしさもあって考えらせられるものがありました。それをあそこで留めるのが番組の目的だったのか？それとも、あとは自分で考えてください、ということだったのか？その辺が番組を見ていて考えさせられました。

個別にみると昔の山車の絵があって非常に興味深かったです。あと菊池さんの言葉に、お祭の後の公民館での打ち上げでの「勝ち負けよりも楽しく」というのがありましたが、そこに地域のリーダーのあり方を感じました。今時、真顔であそこまで言える人は少ないです。リーダーと一口に言っても、地域の条件によっていろいろなリーダーがあると思いますが、あれはあれでひとつの生き方だという気がしました。

運動会でお婆ちゃんが「家には孫はいないけど見ていると楽しい」と言っていました。それがお婆ちゃんの運動会への関わり方というか、ひとつの生き方なのだな、と思いました。

番組でも出ていましたが、隣の子供、何番目の子供かまで分かる、ということがあります。そんなことが煩わしくて都会に出て行った人たちが多かった筈ですが、今懐かしく感じるのはなぜなのか、考えさせられました。

総体的には非常に面白い番組だったと思います。

○中村委員長

斉藤雅博委員お願いします。

○斉藤雅博委員

恐らく半年ぐらいかけた取材だと思います。気仙地域の住民の強い絆、故郷の良さを見事に表現していたと思います。印象に残っているのはリーダーの菊池さんです。地元を愛する姿、胸を張って話す姿、明るい笑顔が非常に印象的でした。最初にけんか七夕の藤つるを取るところから番組がスタートしたのが非常に良かったと思います。「遠足みたいなものだね」と話している場面がありましたが、祭りを楽しみにしている様子が伝わってきました。

私は北上で育ちましたが、子供の頃は町民運動会がありました。やはり終わったあとは公

民館でカレーライスを食べました。40年も前のことでしたが、そのことを思い出して、なんとなく「いいな」と思って見ていました。

八木橋委員もお話されていましたが、家族構成が全てわかっているというようなつながり、子供達は地域で育てる、地域全体が家族である、そのようなことは、今はあまり見られない光景だと思って感心しました。

地域の課題ということになると思いますが、菊池さんの息子さんは、たまたま地元の製菓会社に勤めることができたので、地元に残れたわけです。本当は残りたいが地域に就職先がないと残る事ができません。息子さんは「恩返しをしたい」という話しをしていましたが、そういった地域の課題をもう少し鮮明にしても良かったと思います。

菊池さんが「一緒に笑ったり、怒ったりする仲間好きだ」と言っていましたが、あのような濃いつながりは県内でもだんだんと薄れてきていると思います。地域のつながりや残すべき伝統を、改めて考えらせられた番組でした。けんか七夕は実際に見たことはありませんでしたので、その意味でも楽しく見る事ができました。

〇中村委員長

中原委員、お願いします。

〇中原委員

一戸さんの話しで、この番組は「感動を与えよう」ということでスタートしたということで「なるほどな」と思いました。そのことを知らずに番組を見た訳ですが、番組の願いと狙いはなんだろうと思いながら見ていました。

地域づくり、地域の和、地域のコミュニケーションというものが、今いろいろな問題を抱えている時に、気仙町というところが素晴しい所で羨ましいという思いで最後まで見ました。こういうところが盛岡にもあれば、という思いもしました。でも「いいね、羨ましい」という思いはありましたが、「感動」というものはありませんでした。「感動」ということになると、もう少し菊池さんの“人・家族・苦労話”の部分に深く入って掘り下げていくことがあっても良かったと思います。菊池さんが、七夕とか野球とか運動会、バレーボールなどを楽しんで一生懸命やっているのはいいのですが、あまり苦労、苦労というのも良くないけれども、ある程度、「こういう苦労もあって」という部分をもう少しアピールしてもらえると、私たちにもそういう苦労を乗り越えてやってみよう、という教えになると思いました。

この番組が提起していることは、私たちの身近にそういうことがないことを考えさせることだと思います。そういう意味で参考になるいい番組でしたが「苦労」ということでは、人と人との関わりの中でどのような問題があって参加者が少ないのか？とか、担い手にしても家族の問題にしても、いろいろなことがあると思います。番組を見ての感想としては「素晴しい、いい所だ」という通り一遍で終わってしまった気がします。

けんか七夕では、始めに藤つるを取る場面から紹介してもらってよくわかりました。山車の実物は道の駅に置いてありますが、製作の部分を見せてもらうと「なるほどな」と思いました。

昔の場面が白黒の写真で出ていました。ここはモノクロでもよいので、動く映像で昔の様子を見せてもらえれば、また別な印象をもてたと思います。頑張って探して欲しかったなと思いました。

ところどころ、方言がありましたし、高齢者の話しは何を言っているのかよく分からないということがあります。全部ではなくても字幕を入れてほしい場面がいくつかありました。要所要所にそうした字幕の工夫がほしいと思います。

元気と笑顔、そして地域のあり方を教えてくれたいい番組だったと思います。

○中村委員長

村上委員お願いします。

○村上委員

報道部らしい作品だったと思います。気仙地方の運動会が面白いらしいという話しを聞いて、事実を追いかけて行き、それをつないでひとつの町の顔が浮かび上がってくるという印象を持ちました。けんか七夕は有名ですが、実際に見たことがある人は案外少ないのではないでしょうか、私も初めて見ました。舵棒をぶつけた瞬間の山車に取り付けたカメラの映像が非常に迫力があって、面白いと思いました。そういうところがカメラマンがディレクターをやったセンスなのかなと思いました。

地域や家族のあり方が今は大きなテーマですが、こういう捉え方もあるということで、新鮮さを感じました。一つの家族に密着して取材していく手法もあると思いますが、この番組は地域として捉えながらも、一軒一軒の家が見えるような感じがしました。事前の打ち合わせなどしてない筈なのに、皆さんが同じことを話されているのが非常に印象的でしたし、そ

れが地域のカラーなのだと思いました。菊池さんのキャラクターがとても良く、こういう方が取材対象としていたことは、番組にとっては非常にラッキーだったと思います。19 歳の若者である息子さんも、お父さんの姿を見て行事に一生懸命取り組んでいたことに明るいものを感じました。

七夕の翌週がベースボール大会、少しして町内最大の運動会があり、それが終わったかと思ったら年末にバレーボールと、これは普通ではないという気がしました。でも、地域の人たちにとっては普通であり、楽しみであるということが番組を通して素直に伝わってきました。1 ヶ月かけて作った七夕の山車を壊して、年が明けると次の山車のことを考えているということからも、この町の 1 年の歳時記として根付いていることがよく分かります。時系列どおりにシンプルに追いかけていった作品だと思います。1 時間の番組が短く感じられるほど集中して見ることができて、楽しく元気をもらった番組でした。

〇中村委員長

それでは役重委員お願いします。

〇役重委員

私が一番、あの地域に近いところに住んでいると思います。私も嫁に来た時に「リレー走れるか？」とすぐ聞かれた覚えがあります。でも町民運動会の練習まではしません、やはり気仙町は凄いと思います。

良かったと思った点が２点ありました。ひとつはリーダーに焦点を当てたこと。もうひとつは「祭り」という切り口を取り上げたことです。

私も仕事で地域づくりに関わっています。その地域づくりでは、みんなが頑張っているし、目指している所はひとつです。でも、できる地域とできない地域があります。そのひとつの要素はリーダーです。地域に役員や会長はいますし、“長” の付く人になりたい人はたくさんいます。でもリーダーは私利私欲が絶対に見えてはいけません。純粋に地域が好きで頑張ることができる。それがあればリーダーの他の欠点は周りの人が補えます。そのようなリーダーが大事だということを、理屈抜きに映像で見せてもらいました。

もうひとつの「祭り」は、地域づくりのいい材料であり道具です。なぜかというと若い男性の出番があるからです。どんな過疎地域でも年寄りと子供と女性はいますし、それなりに世代間交流をして頑張っています。地域づくりということで見た場合には、若い男性の出番

があって、なおかつ頑張っているかどうかで大きく差がでます。「祭り」では若い男性が強さを誇示して格好いいという出番を作れるということで、それが地域の頑張りに結びついていきます。それが映像の中でよく見えていました。ただ「すごいな」だけで終わってしまうことがもったいないという感じがしました。背景にはいろいろな課題があって、ひとつひとつクリアしているはずです。番組では、いけいけどんどんに見えましたが、実際にはなかなかできないところがある筈です。菊地さんの息子さんが地元に定着してという流れがありましたが、多くの場合はそれが難しいです。就職のこともあります。子どもは小学校、中学校までは地域に密着しています。でも、高校に行って地元を離れると、それでも地域に残って活動できる子と、離れてしまう子と２つに別れます。地域活動を若い人たちがやっていくということに対しては高校とかそういった方面の理解も必要です。番組にも出てきましたが、職場の理解もあったと思います。いろいろな条件を作り上げる中で、そういった下支えがあって活動ができているのだなと思いました。

公民館での打ち上げの場面がありましたが、私の地域でもかつては普通にありました。ある時、都会から越してきた方が「子供を大人の酒席にはべらせるのはとんでもない」という意見をお持ちで、教育委員会に投書をされました。それ以降、打ち上げをやらなくなったということがありました。気仙町でもいろいろな意見や軋轢がある中で、ひとつひとつそこをクリアしてきた部分があったのではないかと思います。深刻に番組を作る方がいいというわけではありませんが、「すごいな」から一歩、どうすれば気仙町に近づけるのかというような、手掛かりが見せられるようであればさらに良かったと思いました。

番組は地域づくりに取り組んでいるところへの応援歌になっていたと思います。

○中村委員長

久慈委員お願いします。

○久慈委員

私の住んでいる所も田舎ですが、あのようなものはありません。運動会もありません。私も陸前高田の人たちとお付き合いがありますが、変わっていると思います。　いい意味で「こんな文化がある」ということを感じました。「ほのぼのとした、昔はこれが当たり前だった」というところを感じさせてもらいました。山車に取り付けたカメラのぶつかる映像は良かったと思います。けんか七夕の激しさが分かりました。

ドキュメンタリーは真実をそのまま伝えていく。「上がって下がってがなかったので、ちょっと」いう方もいましたが、逆に自然で良かったと思います。ハラハラドキドキではなく、そのまま1年が経過していく事で私はすごく良かったと思いました。ドキュメンタリーとは何かと考えらせられましたが、その辺も追求していろいろなことをやっていってほしいと思います。

○中村委員長

吉田委員お願いします。

○吉田委員

岩手県内に住んでいて、けんか七夕のようなものがあることは思いもしませんでした。町民運動会が55回と言っていましたが、その継続、地域の皆さんが助け合って必死になって地域行事を支え合う力にすごいものがあると感じました。ほのぼのとした懐かしい感じで見ていました。子供の頃は祭りにも必ず参加していましたし、若かりし頃の職場でも、運動会や演劇会で盛り上がりました。今は職場のなかでも行事というものは無くなりました。それだけに懐かしく感じたのだと思います。

地域の状況をみていますと町内会の会長に誰もなりたくない、役員にもなりたくない。みんなが避けています。昔は子供達の野球大会がありました。今は全くなくなりました。そうした中で気仙地区が町内でみんなが助け合ってやっている、今最も失われている地域社会のあり方を教えてくれているような番組でした。これから高齢化時代になってみんなが助け合っていかなければならないということを、番組を通して自然な形で教えてくれていたと感じます。小難しく考えないで自然にみんなが楽しんでいる事を映している。そこに大きなポイントがあると思いました。今回の番組はみんなに示唆を与えていると思います。視聴者にしてみると、番組のもつ何かを想像させる力に大きな価値があるように思います。一番感心した事は、そういうところに着眼したことです。楽しい運動会を映し出している中で皆に考えさせて、こういうことがありますということを自然に浮き彫りにしたことに感心しました。

素晴らしい番組でしたが、二つほど指摘させていただきたいことがあります。陸前高田、気仙地区の生活者の現状や抱えている課題を、人口分布・年代構成・業種構成などのデータも交えてもう少し伝えてくれると、ますます番組の中味が理解できたと思います。

もうひとつは番組タイトルです。「おらほが一番」というタイトルで、これはこれで良かっ

たのですが、「地域」に結び付けた視聴者をひきつけるようなタイトル設定の方が良かったのではないかと感じました。時代の大きな流れの中で、格家族化、個の分散化が進んで地域が崩壊しています。番組の最後の方でそうした中でも元気な町があるというメッセージを伝え、楽しいという状況を映し出しながらも、最後に締めてもらえると番組の質感が上がったのではないかと思います。

○中村委員長

ドキュメンタリーといいますと、私の認識では、意図があってそこを掘り下げていく形が多いのではないかと思います。今回は逆に悩んだことによって淡々と描いていったことが、皆さんのご感想にあったように、好評につながっているという感じがしました。

平和な町の平和な情景、ほのぼのとしたお話を綴っていました。ただ最後に見終わって、この番組は何を意図したのか？と思いました。作られたお二人のお話を聞くまではわかりませんでした。「見ている人がそれぞれ感じてください」という作り方もあるのだろうと思いますので、そういう番組だったのでしょうか。それにしても「気仙地方には随分と元気な人がいっぱいいるね」という印象の番組でした。

番組として面白かったのは２つの山場があったことです。ひとつはけんか七夕、もうひとつは町民運動会です。けんかのお祭りというと、私は西の方のイメージが強いのですが、岩手にもこんな激しいことをやるところがあるのだということを知りました。その２つの山場には、もう少し掘り下げて見たいな、という感じがしたところもありました。

舵棒をぶつけて折れて「バキッ」という音が聞こえた時に「あれ」という感じを持たせたり、迫力のある映像もあって大変面白かったです。山車を作る過程も紹介されていましたが、地区の人たちがまた改めてその年の結束を固めていき、その結束が次のベースボールや運動会につながっていくわけです。運動会になってそれがひとつの秋の山場になっていくという地区ぐるみの活動が、非常によく描かれていて大変楽しく拝見しました。

菊池青年部長の息子さんが地区に残って、地域の希望の星のようになったけれども、負傷してしまったりする情景が描かれていたり、また家族リレーでは断トツで走っているところを、お母さんのお父さんへのバトンタッチが悪くて駄目になってしまい、普通の家庭なら喧嘩になるところをお互いに慰め合うなど、ほのぼのとした所がいろいろあっていい番組だったと思います。

ただ、それで終わってしまう感じがしましたので、気仙地区の気仙語や気仙大工など非常

に特徴のあるところとか、そういうことが祭りと関わっているのかとか、気仙地区の気質とか、過疎の問題とかを紹介して欲しかったように思います。番組では後継者がいなくて苦労をしている、野球も完敗してしまったということもありましたが、もう少し社会性のようなものを引き出せるところがあれば、深みのある番組になったという感じがしました。

たまにはこのような番組を見ても良いなと私は思いましたが、果たして視聴者にはこれで最後まで見ていただけるのでしょうか？まわりの番組があまりにも刺激が強いので、視聴率の観点から少し心配になりました。この点については今後さらに努力していただければと思います。

１点気になったのは最後の締めのところです。「舵棒を切り出してまた次の年が始まる」という表現でしたが、毎年取り替えるのですか？（壊れなければ替えません）　番組の中で去年壊されたので今年取り替えたということがありました。途中で舵棒が壊されたということがなかったので、毎年それをやっているという印象でした。大きな問題ではありませんが、筋書きに一貫性がなかったので、気にする人には気になるのでは、と思いました。

それでは続きまして、欠席委員からのレポートがあれば、事務局から報告をお願いします。

〇事務局

・椎井副委員長のレポートです。

「MIT スーパードキュメント　おらほが一番！」光りの部分だけかと思っていたら、影の部分（後継者不足）も描かれており、楽しく、かつ考えさせられる番組でした。

岩手県内はもちろんですが、高齢化や人口流出などのより総じて県内市町村の疲弊が加速化してきていると聞いています。そうした中で毎年、開催されている気仙町の町をあげての「祭り」や「スポーツイベント」を見て、何とかして住民総合の絆を深め、郷土を愛し守り続けようという主催者、参加者、そして、地域全体の強い思いを感じました。

また、単なる親睦のイベントということではなく、地域対抗という競争意識を掻きたてるイベントが地域の結束と融和に一層効果的に働き、私だけでなく、番組を見た同じような悩みを抱えている地域の人たちにも解決の糸口となる「元気」と「勇気」を与えてくれた番組であったと思います。

２０世紀アメリカを代表する小説家でもあるアーネスト・ヘミングウエイは「困難を克服する最大の糧（かて）は元気を出すことである」と言っていますし、私も若い頃に宮城県北

部の「地域おこし」の仕事に従事していた時に教えられたことですが、過疎は怖くない、怖いのはそこに住んでいる人たちの「心の過疎」で、「地域おこし」はまず「心おこし」からということです。こうしたイベントを通じて地域が元気を取り戻し、お互い助け合い、知恵を出し合い、一体となって困難に立ち向かってこそ道は開けるのだということを改めて思い知らされた次第です。

もうひとつは、考えさせられたことは「影の部分」地方の伝統行事継続に付き物である「後継者不足」の問題です。イベントを継続させるためにも、何とかして子供たちを地元に置いておきたい父親、自身も継承したいと思っている子供、しかし働き場がなく仕方なく故郷を離れざるを得ないといった光景には、気仙町だけのことではないとはいえ、切ない気持ちになります。この番組の菊池さんの場合には息子さんが運良く通勤可能な就職先を見つけられて良かったですね。多くの場合は故郷を離れざるを得ないのが実態だと思います。

元気だけで満足していたのでは問題は解決しません。住民みんなで知恵を絞って次の一手を見つけ出し、行動する事が求められます。気仙町の「次の一手」を期待したいと思います。

最後に９００年の歴史があるといわれる「けんか七夕」は迫力がありました。岩手の伝統文化は奥深いですね。チャンスがあったら見てみたいと思っています。

・斎藤純委員のレポートです。

陸前高田にスポットをあて、地域の活動を紹介した、いい番組だと思いました。
ただ、ちょっと冗漫でした。私は運動会のところで退屈しました。

これをみていて、ある調査のことを思い出しました。テレビの視聴時間と犯罪発生率の関係を調べたところ、テレビの視聴時間が長い地域では犯罪が起こる確率が高いという結果がでました。が、よく調べると、テレビの視聴時間の短い地域では、祭りやスポーツや旅行など地域の活動が盛んでした。つまり、それらが忙しくてテレビを見る時間がないことがひとつ、もっと大切なのは地域の人々のつながりが深いということです。

したがって、犯罪の少ない地域は「テレビの視聴時間が短い」という結論ではなく、「地域活動が盛んなため、人々の結びつきが深い」という結論が引き出されました。

テレビ局の方にはやや耳の痛い話かもしれませんが、テレビは悪だという話ではないので、ご容赦ください。

陸前高田はおそらく犯罪の少ない地域なのではないでしょうか。

・菅原委員のレポートです。

番組は非常に、と申しますか妙に面白かったので、本当は出席して、何処がどう面白いのか私感を述べたかったのでありますが残念です。

有名な「喧嘩七夕」から始まり、物凄い「運動会」、更に「バスケットボール大会」までトコトン本気でやるところが好きだったのですが、その都度、公民館に集合して“打ち上げ”をやるところに最近希薄になった「人のぬくもり」を感じました。

笑いましたのは、ナレーターが「これは朝ではありません、夜です」と言ったところ。運動会の（なつかしい）タバコリレーの場面で「健康的なのか不健康なのか・・・」と言ったところ。おかしくも気持ちを暖かくしてくれるほのぼのとした番組でした。

・東海林委員のレポートです。

今回見て感じた、正直なところは第一にこの気仙町地区がうらやましいということ。

地域の活動がだんだん先細りしている盛岡の状況を考えると、この番組で取り上げた陸前高田市気仙町の各地区の活発な活動は尊敬に値すると思います。これを素材として見つけられた番組制作者の皆様に敬意を表します。

テレビドラマとか映画の中でしか今はもう見られないようなご近所同士のつながりや、このような意地をかけての近在の地区同士の競い合いが楽しくなるのは自分の性質のせいなのかもしれません。大人たちが頭を寄せ合って運動会の作戦会議などしている様子はマンガみたいで、見ていて笑ってしまいました。地区同士の競い合いは住民みんなの帰属意識を強めてくれるでしょうから、番組に登場した子どもたちだってこれからも自分の暮らす地区にもっとプライドを持ってくれるはずと信じます。このような番組はそういう意識を高めるのにさらにプラスの材料となると思いますので今後もこのような、地域の面白さを視聴者に紹介するタイプの番組を待っています。

プログラムとしての出来という点では、時間的な制約もあるのでしょうが何か平行して進む小さなネタ素材をはさみこんでくれたら良かったのでは？本筋の地域の皆さんの描写も引き立つかと思います。

また、ここで登場した、町民運動会で親子リレーに参加された佐藤さんご一家のコメントが、「引越しか何かの都合でもう運動会は最後」のように聞こえてしまう感触がありました。

実際には「家族全員での参加はこれで最後になる」という意味なのでしょうが、受け取る側にしてみると「このご家族には何か深い事情があるのだろうか？」と思っていたのに何もないから、少し不思議な感じがしてしまいます。

見ていてふと、なぜこの時期にこんな秋の運動会を取り上げているのか？という疑問も途中でわいてきましたが最後まで見て納得しました。まだ行事が続いて行われているとは正直驚きです。通してみていて、とても楽しそうなのでできるなら自分も現地に行って参加してみたい！などとも思ってしまいました。

「楽しんだもの勝ち」という青年部長の菊池さんの言葉には、ただただ納得させられ、しっかりと感化されてしまったようです。

〇中村委員長

分かりました。それでは、これで本日の議事を終了とさせていただきます。

〇事　務　局

中村委員長、ありがとうございました。それではこれで番組審議会を閉会とさせていただきます。

なお、今回の審議会の模様は２月２０日（土）朝４時４２分から「めんこいテレビ番審リポート」として放送いたします。

次回は３月９日（火）に開催となりますので、よろしくお願い致します。

７．審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

８．審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

＊ 平成２２年２月１０日（水）　産経新聞　東北版

＊ 平成２２年２月２０日（土）午前４時４２分から４時４５分まで「めんこいテレビ番審リポート」内で放送

＊ 据え置きの書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

９．その他の参考事項

特になし